

タイトル	ジャン=ジャック・ルソーに関する新しい統一的解釈 : 永見文雄 『ジャン=ジャック・ルソー自己充足の哲学』 (勁草書房, 2012年) を読む
著者	小林, 淑憲; KOBAYASHI, Yoshinori
引用	季刊北海学園大学経済論集, 62(1): 81-88
発行日	2014-06-30

## 《書評》

## ジャン=ジャック・ルソーに関する新しい統一的解釈

— 永見文雄『ジャン=ジャック・ルソー 自己充足の哲学』  
 (勁草書房, 2012年)を読む —

小 林 淑 憲

## はじめに

この書評は、永見文雄中央大学文学部教授が2012年9月に著した『ジャン=ジャック・ルソー 自己充足の哲学』を対象とする。評者は2014年2月1日に東京大学で行われた研究会において、本書を批評する機会に恵まれたが、この書評は基本的にその報告を原稿にしたものである。2012年はルソー生誕300周年の記念すべき年であって、評者は、周年記念にふさわしく公刊された、意欲的かつ挑戦的な本研究を批評することで、周年記念事業に一つの足跡を残したい。書評の手順として、まず「本書の構成と内容」を紹介した後、ついで内容について批評する。

## 1 本書の構成と内容

本書は巻末の「文献表」や「索引」も含めれば総頁600頁を超える大著であるが、大別すれば4部に分かれる。本書全体の目的を明らかにした序章と、第一部「生涯」、第二部「作品」、第三部「思想の検討」である。このうち第三部の「思想の検討」に「自己充足の哲学」という副題が付せられていて、これは本書全体の副題でもあるので、一瞥して第三部が本書の中心をなすことが分かる。本書は「まえがき」と、巻末590頁の「初出一覧」によれば、1982年から97年にかけて執筆された論文をつなげ、必要に応じて書き加えられた。特に350頁になんなんとする第一部と第二部は出版に当たって新たに書き下ろされたものである。

## (1) 序章について

「異端者ルソー 文化の世俗化とフランス啓蒙」と題された序章では、本書の目的として、ルソーを整合的かつ総合的に、つまりトータルに理解しようとする視座が明らかにされる。ただし、著者が定めた「自己充足性」という枠組みによって遂行されるトータルなルソー理解という目的は、「ルソーがいかなる意味において近代を切り拓いたか」(本書6頁、以下本文中の頁は全て本書のものである)という、より大きな目的を遂行するための準備作業として遂行される。著者によれば、ルソーは「異端的思想家」である。著者がルソーを異端的と形容するのは、ルソーが「文化の世俗化」に寄与したというよりも、むしろ同時代の楽天的な進歩思想とは相容れない「ペシミスティックな」思想家であり、また、もはや時代遅れになりかけていたにもかかわらず、自然状態の仮説をあえて唱えた思想家であったからだという。つまり、著者の考えでは、ルソー

は近代的と形容するにはあまりに傍流に位置する思想家であり、従来そのように見られていたほど、近代を切り開いた思想家と単純に性格づけるのが困難であるため、ルソーの思想を、ルソー自身に即してトータルに分析する必要があるというのである。

## (2) 第一部について

そこで著者は、第一部において、まずルソーの生涯を丹念に調べ、叙述する。ここで展開される伝記の特質は、何よりもその詳細かつ浩瀚な叙述にある。250 頁に及ぶ記述は、日本人が書いたルソーの伝記そのものとしては、おそらく最長であろう。だが、注意すべきは第一部が単に長大なことだけではない。スタンダードな研究書はもちろんのこと、ラルフ・アレクサンドル・リーの編集した『書簡全集』やルソー協会の『年報』、スイユ版の『ルソー全集』、近年刊行された研究書や論文を縦横に渉猟し、ルソーの誕生から始まって、主要な作品をほとんど公にしたルソーのいわば「余生」に至る期間を超えて、死後の扱われ方に至るまで、きわめて詳細にその生涯および関係者の素性を跡づけている点に最大の特質を認めることができよう。そのことは例えば『告白』に全く記述のない、『ジュリ』の崇拜者ベルナルドーニ夫人との交流、あるいはまたルソー晩年の心の支えとなったマドロン（ドレッセル夫人）やイザベル・ディヴェルノワの素性および彼女らとの交流、ルソーの被害妄想に起因する晩年の諸事件などにまで考察が及んでいる。さらに、著者がいわば知識社会的関心を随所に示している点も見逃せない。例えば 63 頁の「アカデミー」とは何か、あるいは 199 頁「啓蒙の知識人たち」など、思想家の思想をそれ自体としてただ言い換えるのではなく、思想が成立するための社会的条件に言及したことで本書の内容がより重厚になっていると思われる。

第一部はまた、第二章「ルソーの人生に関するいくつかのこと」を含み、複数の主題に焦点を絞って分析していることもその特質として挙げられるべきであろう。著者は「書く人ルソー」、「ジュネーヴ人ルソー」、「異邦人ルソー」、「出自から見たルソー」、「旅と職業経験、そして教育」という 5 つの視点から、ルソーの生涯およびルソーの人となり照射している。最初の「書く人ルソー」で述べられているとおり、この第二章は、ルソーが「書くことに専念した外部の事情」を論じたものであり、ルソーに固有の、あるいは 18 世紀に特徴的な要素を明らかにすることによって、ルソーという著述家の特質の輪郭をいわば外側から描く作業である。このうちとりわけ注目されるのは、一つには「異邦人ルソー」において、「英国嫌い・フランス」びいきに言及している点である。ルソーが『社会契約論』第 3 編第 15 章においてイギリスの国制を批判したことはあまりにもよく知られているが、著者は一つの根拠から全体の傾向を断定することはせず、『ジュリ』におけるボムストーン卿の役どころや主人公サン＝プルーのイギリス評価などから、ルソーのイギリス嫌いという理解に対して一定程度の修正を試みている。また、フランスの社交界になじめなかったルソーが、『学問芸術論』においてその習俗を批判したとしばしば強調されてきたが、著者はやはり冷静にルソーのフランス趣味、あるいはフランスへの偏愛を指摘しており、ルソー研究はともするとフランス文化に対するルソーの批判的側面ばかりを強調する傾向にあるが、そうした理解に対して一定程度の修正を迫っている点も見逃ごせない。

第一部第二章で注目すべきは、もう一つ、やはり「2 ジュネーヴ人ルソー」である。近年のジュネーヴとルソーとを関連づけた研究の隆盛を背景に、著者はジュネーヴの制度や歴史、ジュネーヴと『社会契約論』との関係、15 歳でジュネーヴから離れたルソーがいかにしてジュネーヴの現実を知ったか、などについて考察を加えている。ただし、『社会契約論』はジュネーヴ的

作品かという自ら立てた問いに対して、著者はこの作品がジュネーヴの統治の歴史に照らして読まれるべきであるとするにとどまっている。この点については、後述しよう。

### (3) 第二部について

さて、第二部ではまず著者はルソーの思想の発展を、作品を主題別に整理することによって跡づけ、ついでルソーの主要作品の解説を試みている。このうち主要作品の解説は、作品の着想や出版に至るまでの事情と、作品の構成および内容を、各作品についてかなりの頁を割いて詳細に論じている。作品の主題別整理に関して押さえておかなければならないのは、著者が259頁以下で挙げた「ルソーをよりよく理解する三つの方法」である。すなわち第一に、ルソーのユニテの存在を前提とすること、第二に第二論文がルソーの思想的体系の根底に位置すると見て、この作品に視点を据えること、第三に複数のテキストを重ね読みすることで、ルソーに固有の観念、概念を浮き彫りにするという方法である。このように提示された著者の方法論を、本書全体の序章の記述と併せて読んだ時、直ちに知られるのは、本書がルソーのユニテというルソー研究の本流にその系譜を持つことである。序章において示された、ルソーの思想をトータルに解釈しようという姿勢は、ギュスタヴ・ランソンの研究において夙に指摘されて以来\*1、ルソーのユニテの問題として、多くの研究者によってさまざまに試みられてきた。この意味において、本書はスタロビンスキーやビュルジュラン、バチコといった錚々たるルソー研究者の研究に連なる\*2。しかも戦前の日本におけるルソー研究は、明治期においては中江兆民や植木枝盛に代表される政治思想研究と、国会開設を契機に自由民権運動が退潮して以降の、島崎藤村や森鷗外に代表される文学研究に二分されており、総合的研究といえ、戦後における福田歓一や、その弟子吉岡知哉の研究、またごく最近の細川亮一の研究など\*3、一部の研究に限られることに鑑みれば、本書の意義は大きいと言わねばならない。

ところで第二部第四章において、著者は「作品間に筋道を付ける」ことを特に意識して主要作品の解説を行っている。ここで最も重要と思われるのは、285頁以下で、本書がなぜ第二論文に視点を据えるという方法を採用したかについて述べている点である。著者によれば、第二論文の第一部で描かれた自然状態に生きる自然人は、自己自身で充足するという特性を一貫して保持しているのに対して、第二部では、自然状態から社会状態への移行を経験するにつれて、人間は「常に自己の外にあって他者の臆見のなかでしか生きることができず、自己自身の感情すらも他者の判断から引き出すしかすべがない、弱く悲惨な状態」(285頁)に陥るといふ。つまり著者は、自然人に「自己充足」の特性を見るのに対して、「人為」に「非充足性の刻印」を見ようとする。このように著者はルソーが自然人の概念を立てることで、人間の本源的善性がルソーの第一原理として確立されたと見る。そして、この命題を手がかりとして、ルソーは一方において、独自の「宗教哲学」を構築すべく、神の善性の上にこの命題を基礎づけるという作業を行い、他

\* 1 Gustave Lanson, 'L'unité de la pensée de Jean Jacques Rousseau', *Annale de la Société Jean Jacques Rousseau*, tome 8, 1912.

\* 2 Jean Starobinski, *Jean-Jacques Rousseau, la transparence et l'obstacle*, Gallimard, 1971.; Pierre Burgelin, *La philosophie de l'existence de J.-J. Rousseau*, J. Vrin, 1973.; Bronisław Baczko, *Rousseau, solitude et communauté*, trad. de Claire Brendhel-Lamhout, Paris-La Haye, Mouton, 1974.

\* 3 福田歓一『ルソー』講談社、1986年。吉岡知哉『ジャン=ジャック・ルソー論』東京大学出版会、1988年。細川亮一『純化の思想家ルソー』九州大学出版会、2007年。

方でルソーは、人間の本源的善性を前提とすれば、統治に関して問題とすべきは、人間の邪悪さではなく、悪く治められていることであり、あるべき本来の統治は何かという政治哲学の構築という課題を選択することになったというのである。

#### (4) 第三部について

さて第三部「思想の検討—自己充足の哲学」は、9つの章からなっており、1982年から96年にわたって著者が蓄積した論考を发表順にまとめたものである。第一章「『告白』をめぐる批評的言説」では、『告白』を対象として、ルソーのような自己を語る人間に疑いの眼差しを差し向ける註釈という営みと、ルソー自身が読者に期待する「自伝の言葉の補完作業としての」想像力という営みとを対立させ、自己を語るルソーという著述家を理解するには双方の営みによる働きかけが必要不可欠であることが明らかにされる。すなわちルソーの人生のさまざまな出来事に起因する罪責の念が『告白』という作品をもたらしたのであり、そのことはまさに註釈の営みによって明らかにされるというのである。

第二章「言葉の発見へ」では、著者はヴァンセンヌの啓示に、思想家ルソーではなく、「言葉の発見」への第一歩を踏み出した「書く人ルソー」の誕生を促した契機を見いだす。著者は、『第一論文』から『第二論文』に至る過程の中に、「ひとつの永続的な構図」(375頁)を見いだそうとする。その構図とはすなわち、命題を呈示した後、続いてそれを支える事例が、ほとんど古代史から引用されることで、命題の「証拠としての相貌」を呈するというパターンである(381頁)。ルソーは自己の呈示する命題の真実性を古代史に求めるという手続きを繰り返す、その姿勢を貫いたというのが著者の主張である。著者はルソーが古代史以外から事例を引用しなかったと言うわけでは決してないが、古代以外から引用した事例は、「衣装づけ」に過ぎなかったと解釈する。

第三章「自然へは帰れない」は本書のキー概念である「自己充足」に著者が到達したことを示す論文として重要である。「自然に帰れ」というフレーズをルソーに帰着できないという指摘は、著者の師匠である小林善彦によってこれまで繰り返されてきたが、著者は小林氏の業績を踏まえて、第一にフランスにおいてルソーは「自然に帰れ」と主張した思想家であると全く主張されていないのかどうか、第二にルソーが「自然に帰れ」と唱えた思想家であるという誤解に対して、研究者の取るべき態度はいかなるものか、という二点について考察している。第一点について、著者は日本において「自然に帰れ」をルソーの言葉とした元凶は、岩波新書版『ルソー』であることを指摘した上で(408頁)、欧米の証言をつぶさに検討する。その結果、「自然への回帰」は、カッシーラーのように自己の「内面への回帰」という意味に限定されたり、グイエのように、人間には自然状態への回帰が不可能であることを論証したりしていたことを押さえた上で、著者は日本以外でも「自然への回帰」が問題とされ続けていたことを明らかにする。このことを踏まえて著者は、第二点について、「自然に帰れ」がルソーの思想を語る妥当性を持ちうるとすれば、それは「自己の内面に立ち戻れ」という意味においての他にないことを指摘する。著者によれば自己の内面への回帰は自然状態への回帰とは異なって人間にとって可能であり、この概念によって、ルソーの思想における「孤独」と「自由」と「幸福」の三つの観念の内的連関が与えられるのではないかという仮説を呈示する。著者は以下、「自己充足」の概念装置によってルソーの生涯と著作の意味を新たに定義し直そうとするのである。これに付け加えれば、この第三章は緻密に論証されており、本書によって今後ルソーを「自然に帰れ」と唱えた思想家であると

は言えなくなると評者は考える。

第四章「キー概念としての自己充足」では、自己充足の概念がまさにルソーのユニテを説明するための鍵たりうることを論証する。すなわち、第二論文、『孤独な散歩者の夢想』、『エミール』において、いかに孤独と自由と幸福が相互に関連しているかが明らかにされる。すなわち他者を必要とせず、他者に依存せず、現在の自己の存在を十分に享受できている状態、あるいは欲望が能力を超えない状態にあることがこれらの作品において深く関連することを著者は緻密に論証している。さらに著者は、自己充足の概念によってルソーの政治哲学をも展望するため、いわば補助線としてパスカルを援用する。ジャンセニスト・パスカルにおいては、原罪を大前提とする以上、この世において人間が神のごとき自己充足を享受することはない。これに対して、ルソーは原罪にとって代えて「自己完成能力」を置いたという。ルソーはこの自己完成能力によってのみ、「原初の自己充足性の内実を構成する諸価値と等価物がもたらされ、したがってこの世においても人間が幸福を実現できると主張したかった」のではないかと解釈する(460頁)。したがって、社会と隷従と悲惨の対観念である孤独と自由と幸福という自己充足の内実を、社会状態において実現する可能性を探ることが『国家学概論 (*institution politique*)』の課題になるというのである。

第五章「ルソー思想の基本構造」では、ルソーの思想の独創性が、18世紀の通念としての神の概念と、ルソーが独自に措定した自然状態とに挟まれた中間的な状態としての18世紀の現実を批判的に捉え返すことにありと仮定し、その際に自己充足の概念があらゆる肯定的な価値を統括する役割を担うことにあることを論証しようとする。したがって、この章ではとりわけ『孤独な散歩者の夢想』の「第五の散歩」と『第二論文』とを中心的な素材としつつ、自己充足の概念規定や、その具体的内容である孤独、自由、幸福の三観念の相互連関が再び論じられている。しかも、ここでもパスカルとルソーの対比がなされ、救済に関して、パスカルの恩寵による宗教的救済に対して、ルソーの自己完成能力による自己救済が強調されている。もとよりルソーは宗教による救済を否定したのではないと著者は断りつつ、「人間は自己の責任と能力においてこの地上でも自由と幸福を実現しうる」(501頁)とルソーは考えたのであり、「自己完成能力という概念によって、責任帰属の新たな主体としての人間を創り出した」という重要な指摘をしている。

第六章では、これより前の二章が主として第二論文や『エミール』、『孤独な散歩者の夢想』やその他の自伝的作品を扱ってきたのに対し、『社会契約論』を中心的な考察対象として、「ルソー的アウトルケイア」と「本来的社会状態」との関係が問い直される。著者は「ルソー的アウトルケイア」という言葉を用いて、「自己充足の概念のルソー的ありよう」を示す。著者が自己充足でなくわざわざ「アウトルケイア」を使用したのは、この言葉によって、ルソーにおける自己充足の概念が「担っているかなり大がかりな歴史的含意」が想起されるからである。

また著者のいう「本来的社会状態」とは、*droit naturel* (自然法)に基づく自然状態や、「社会慣習的不平等」を認める *droit positif* (実定法)に基づく社会状態ではなく、*droit politique* (国制法)に基づく社会状態を指すものとしている。ここから著者は、国制法の根拠をどこに置くべきかの問題と、国制法に由来する政治的権威の正当性の問題とが、必然的に自由の問題の解決を要請し、それが『社会契約論』の主題となると主張する。

こうした点を踏まえて、著者は、第二論文で徹底的に批判された社会状態のアンチテーゼとしての本来的社会状態は、「自然状態の自己充足性を喪失した人間」が、孤独を別としたアウトルケイアの本質的諸価値(自由、幸福)を体現しうる社会状態であると解釈する。

第七章は、ユダヤ=キリスト教的神の自己充足の概念のルソー的ありようを手がかりとして、「ルソーの現象」の根底に貫く「内的思考の構造」の解明を試みる(537頁)。前章と同様に、「ルソー的アウタルケイア」の本質が如何なる手順で明らかにされるかについて再び考察した後、著者は「ルソー的アウタルケイア」の「問題圏域」を、①実存の意味の開示、②時間性の省察、③パスカルとの類縁性、④アウタルケイアの系譜学、⑤主体の問題と、全部で5つの観点からスケッチすることでルソー解釈を展望しようとする。その結果、著者が主張するのは、ルソー的問題とはすなわち「文化から文化へ」の問題、言い換えれば「現にある社会状態に対して真にありべき社会状態」を、「既に始められてしまった人為」に対して「完成された人為」を対置することであるという。この「完成された人為」というのが『社会契約論』に描かれた国家、著者の言葉で言えば「完璧な全体」であることは言うまでもない。

第八章「身体と肢体、あるいはパスカルとルソー」は、ここまで何度か言及のあったパスカルとルソーとを比較し、パスカルが如何なる意味においてルソー理解に資するかを問うている。著者が着目するのは『パンセ』の中の身体と肢体をめぐる7つの断章群と、ルソーの理想とする政治体とその構成員とが創り出す関係との類似性である。すなわち著者は、共同体全体が身体として、各肢体を受け入れ、各肢体はその全てを一般意思の指導に従うというルソーの社会契約の定義の中に、パスカルの「身体—肢体関係の基本的構図」を見ようとする。そして最後に、アナロジーが偶然かどうかを検討しているが、両者の相違点が4点打ち出されるにとどまっている。

最終章は「震災が生んだ神学論争、あるいはヴォルテールとルソー」と題されている。発表されたのは阪神淡路大震災から約1年後の1996年4月である。これを受けて、著者は、『リスボン大災害についての詩』、『摂理に関するヴォルテールへの手紙』、さらに『カンディード』と、有名なリスボンの大地震を契機に戦われた論争の概略を詳細に紹介している。そして18世紀のよく知られたこの論争から、「どんなに些細なことに見える日常的事件であっても、内面の関心に合致する限り鋭い思想的問題となりうる可能性を秘めている」(585頁)という一つの教訓を導き出している。

## 2 内容についての批評

本書は、自己充足の概念によって、ルソーの思想を総合的に解釈しようとした大きな意義のある研究である。ルソーに接近する態度も安易に外在的な基準を持ち込まず、ルソー自身に即して解釈しようとしたものであり、ルソーの生涯や作品を分析する際の実証のレベルは、正確な事実確定に基づいて行われたため非常に高いものと評価すべきである。しかしながら、いかに枠組みが堅固で実証的に優れていても疑問点を全く免れているわけではない。以下、大小5つの疑問点を指摘しておきたい。

著者は自己充足の概念が、ルソーを解くための「キー概念」たりうることを、1987年当時の教皇ヨハネ=パウロ2世のクリスマスミサでの発言に関する新聞記事に見いだした。したがって著者にとって、近現代人は自己充足を課題とするにもかかわらず、未だその理想を実現できていない状態にあると解釈できる。著者は、ルソーがそれを我々に教え、また、我々がいかにそれを獲得するかが重要であるかを教えていると見ているのであろう。著者にとって、ルソーはこの意味において近代を切り拓いた思想家ということになると思われる。もしもそうであるとすれば、しかし、そのことは十分に裏付けられているのだろうか。著者は496頁において、自己充足状態

がルソーの現実の生活において経験されたことを根拠に、それがこの世においても実現可能であると述べているが、直前の495頁においては、『対話』の記述を根拠として、ルソーは「孤独ではあっても、悲惨ではなく、それどころか、彼だけがこの世で真の幸福を享受しており、真に自由な状態にあり、自己自身で充足している」と書いて、自己充足できるのはルソーだけであることを強調しているからである。しかしルソーだけが自己充足しうるのであれば、ルソー自身が人間は自己充足できないと考えているということになり、したがってルソーは近代を切り拓いた思想家ということにはならないのではないか。

次に513頁、539頁、543頁などにおいて、神および自然人という二つの仮構という言葉が繰り返し使われている。自然人が仮構されたものという理解は、第二論文の「歴史的な真理ではなく、仮説的で条件的な推理」との有名な文言から妥当であると考えられるが、「仮構としての神」とはどういうことであろうか。ルソーの宗教論が理神論的であることは否定しないが、ルソーは神は仮構のものと考えているのか。それはそもそもルソーが否定した18世紀の唯物論的な理解ではないのか。確かに「サヴォワ人助任司祭の信仰告白」では、神の本質を論ずることは回避しようとしているが、ルソーは感覚や理解力など人間の精神活動によっては捉えきれない、「力強い賢明な意思」がこの世界を支配していることを確信してはいなかったであろうか。著者は仮構にfictionのルビを振っている。fictionは手元のプチロベール(Petit Robert)を見ると最初にmensongeとあり、次にFait imaginé (opposé à réalité)とある。著者は如何なる意味において仮構という言葉を使っているのであろうか。

また既に触れたように本書では、ルソーとパスカルとの類縁性が複数の視点から繰り返し指摘される。ルソーがパスカルに多くを負っていたという見方は、カッシーラー『啓蒙主義の哲学』などによって示されている。カッシーラーは、啓蒙主義に突きつけたパスカルの問題提起すなわち世界の不条理と、原罪に基づく人間の悲惨さ、人間理性の無力さを強調した。カッシーラーによれば、『パンセ』の中で描き出された人間の偉大さと悲惨さは、ルソーの第一論文、第二論文で再現されたという\*4。ただ、ルソーにとって原罪の教義は妥当性を失っていたから、ルソーは恩寵に期待するのではなく、「純正」で「真に人間的な共同体」\*5を考察することによってこの問題を解決しようとしたという。とすれば、著者のルソー解釈の大枠は既にカッシーラーによって与えられていると考えられはしないだろうか。もしもそうであれば、問題とすべきは、カッシーラーの解釈に対していかに考えるかというスタンスの問題である。この問題は、著者自身ルソーがパスカルについて「熱を込めて語ることはなかった」と証言しているにもかかわらず(572頁)、なぜ繰り返しパスカルを参照しなければならないのかという素朴な疑問とも連なっている。

小さな問題として第四に、著者はルソーが自己の呈示する命題の真实性を繰り返し古代史に求め、古代以外から引用した事例は、論文らしい体裁を整えるための「衣装づけ」に過ぎなかったと解釈するが、それは妥当であろうか。著者は『スタニスラスへの回答』の「私は近代の国民をも引用している」との記述や『ナルシス』「序文」の「近代の例」という言明を「いじらしい執着」として処理しているが(383-384頁)、ルソーが繰り返しているからこそ意味あることとなぜ解釈してはいけないのであろうか。この「近代の国民」とはスイス人をさすが、ルソーのスイ

\* 4 エルンスト・カッシーラー(中野好之訳)『啓蒙主義の哲学』紀伊國屋書店、1962年、189頁。

\* 5 同書、192頁。



スに対する評価は、例えば『ジュリ』の中でサン＝プルールが「近代の中で古代的な人間がみられる自由で質朴な国」だと述べており、第一論文や『スタニスラスへの回答』の記述と一致する。ルソーが、スイス国民を古代国民と比肩すると見なしているとすれば、ルソーのスイス評価を単なる衣装付けと処理するのは適切ではないのではないか。

最後に本書の論旨からすれば枝葉の問題であるが、本書で何度か取り上げられているルソーとジュネーヴとの関係について、著者は「祖国ジュネーヴに対する絶対的忠誠」がルソーという「存在の根幹」をなしているとまで書いているが(198頁)、それは妥当だろうか。もしも絶対的忠誠といった心的態度があるなら、なぜルソーはジュネーヴに居住せず、ほとんどの著作をジュネーヴで書けなかったのかという疑問が湧く。しかも1754年夏の帰国以降、ジュネーヴ人たちが再三帰国を促したにもかかわらず、ルソーはこれを拒否した。著者はルソーが「ジュネーヴ定住の夢」を断念した理由を、デピネ夫人によるエルミタージュ提供の申し出という通説にしたがっている(81頁)。評者はその理由は否定しない。しかしもっと隠された理由があるのではないか。それはジュネーヴが政治的紛争の火種を遺していたことである。54年夏の滞在中、ドリュックは「私に絶えずつきまとって悩ませていた(m'obsedoit sans cesse)」と『告白』にある\*6。またルソーの友人ジョルジュ・ル・サージュ(子)の手記によれば、ルソーの帰国の際、饒舌なドリュックはルソーを毎日訪問し、政治問題をまくし立て、会話をほとんど独占することもあったという\*7。実際、パリに帰る直前にテレーズを伴ってドリュックの家族とともに湖水巡りをしている。政治運動のリーダーであるドリュックはルソーを自分たちのグループに巻き込みたかった。しかしルソーはこれを警戒した。ルソーはジュネーヴのブルジョワと空間的距離を取っておきたかった。だからデピネ夫人の申し出は渡りに船だったのではないか。実際、後年デピネ夫人がジュネーヴ旅行のお供を申し出た際、ルソーはこれを拒絶している。著者はこれをどのように考えるか。

関連して、著者は286頁で、「献辞」は「共和国の現状を憂いてその統治の実態を批判する意図が歴然」としているとしているが、果たしてそれは妥当か。ルソーの上述のジュネーヴに対する心的態度は、「献辞」や『社会契約論』など作品の中にも現れているのではないか。ルソーは「献辞」においてはジュネーヴの政治制度を理想的制度だと言うだけでなく、総会構成員、為政者、女性も皆、自分の選ぶ祖国の理想的存在として熱狂的な賛辞を呈した。『社会契約論』においては、譲渡も分割も代表すらできない人民主権を正当化し、為政者はそれを篡奪する傾向があると主張する一方で、監察官制度論やローマの民会論など人民の利害を必ずしも擁護しない議論を展開している。

\*付記 本稿は日本学術振興会・科学研究費・基盤研究(B)課題番号24330039(「ルソーと現代デモクラシー」, 研究分担者)の助成による研究成果の一部である。

\*6 Jean-Jacques Rousseau, *Œuvres Complètes I*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1959., p. 393. 岩波文庫版『告白』(中)181頁。

\*7 *Correspondance Complète de Jean Jacques Rousseau III*, édition critique établie et annotée par R. A. Leigh, Institut et Musée Voltaire, 1966., appendice 135.